

国内最大級のネットワーク

~臨床研究センター・臨床研究部を設置している病院~

中国四国

- 52 鳥取医療センター
- 53 米子医療センター
- 54 松江医療センター
- 55 浜田医療センター
- 56 岡山医療センター
- 57 南岡山医療センター
- 58 吳医療センター
- 59 福山医療センター
- 60 広島西医療センター
- 61 東広島医療センター
- 62 関門医療センター
- 63 山口宇部医療センター
- 64 岩国医療センター
- 65 徳島病院
- 66 四国こどもとおとなの医療センター
- 67 四国がんセンター
- 68 愛媛医療センター
- 69 高知病院

近畿

- 41 京都医療センター
- 42 宇多野病院
- 43 舞鶴医療センター
- 44 南京都病院
- 45 大阪医療センター
- 46 近畿中央胸部疾患センター
- 47 刀根山病院
- 48 大阪南医療センター
- 49 神戸医療センター
- 50 姫路医療センター
- 51 南和歌山医療センター

(2018年4月1日)

北海道東北

中国四国

- 52 鳥取医療センター
- 53 米子医療センター
- 54 松江医療センター
- 55 浜田医療センター
- 56 岡山医療センター
- 57 南岡山医療センター
- 58 吳医療センター
- 59 福山医療センター
- 60 広島西医療センター
- 61 東広島医療センター
- 62 関門医療センター
- 63 山口宇部医療センター
- 64 岩国医療センター
- 65 徳島病院
- 66 四国こどもとおとなの医療センター
- 67 四国がんセンター
- 68 愛媛医療センター
- 69 高知病院

九州

- | | |
|---------------|---------------|
| 70 小倉医療センター | 77 嬉野医療センター |
| 71 九州がんセンター | 78 長崎医療センター |
| 72 九州医療センター | 79 長崎川棚医療センター |
| 73 福岡病院 | 80 熊本医療センター |
| 74 大牟田病院 | 81 熊本再春荘病院 |
| 75 福岡東医療センター | 82 別府医療センター |
| 76 肥前精神医療センター | 83 鹿児島医療センター |

「NHO PRESS」はインターネットで、バックナンバーもご覧いただけます

【NHO PRESS】で検索

検索



http://www.hosp.go.jp/nho_press.html

NHO PRESS

National Hospital Organization

vol.7
2018.5

特集

明日の医療につなげる NHOの研究活動

~臨床研究や先進医療への取り組み~



より良い紙面にするため
アンケートに
ぜひご協力ください
抽選で書籍プレゼント!

セーフティネット医療 ~神経・筋難病の最前線~
地域医療 ~岡山医療センターの周産期医療~
スペシャリストの素顔 ~理学療法士 & 臨床研究コーディネーター~
【連載】こんな取り組みやってます
【連載】病院の管理栄養士が考えた体が喜ぶレシピ
【連載】もしもに備えて

02 特集

明日の医療につなげるNHOの研究活動

- 06 NHO～こんな取り組みやっています～
笑顔でつながる院内ミュージカル－東京医療センター－
- 07 スペシャリストの素顔 理学療法士 & 臨床研究コーディネーター
- 09 セーフティネット医療 神経・筋難病の最前線
- 11 地域医療 岡山医療センターの周産期医療
- 13 病院の管理栄養士が考えた 体が喜ぶレシピ
「きし麺状の“だんご”がポイント～だんご汁～」
- 14 もしもに備えて「あなどることなけれ！やけど（熱傷）の対応」／アンケート



『伝わる技術 - 力を引き出す
コミュニケーション』
風間八宏著 / 講談社現代新書

私の息抜きのひとつに、名古屋グランパスのサッカー観戦があります。グランパスはJリーグ発足当初からの名門ですが昨年はJ2に降格し、チームの立て直しのために迎えられたのが前川崎フロンターレ監督の風間八宏（やひろ）氏でした。彼の指導のもと、チームは1年でJ1への復帰を果たしますが、彼がどうやって1年で復帰させたのか、彼の哲学と若手育成の手法がまとめられているのがこの1冊です。

彼の若手育成スキルのひとつに“伝えないから伝わる”というものがあります。今ではマニュアル本があったりして教えてもらうことが当たり前の中になっている気がしますが、彼は最

初、わざと何も教えないのです。その狙いは自分で学ぶための“受け皿”をつくりさせること。選手たちが自分と向き合い、自分はどうなりたいのかを考える時間を持つことで、自分勝手な常識にとらわれない、学びたいという環境を自らつくるのです。こうした“伝える技術”を基礎とした組織づくりや若手育成のノウハウが詰まっているのがこの一冊で、そこに若手を育成している指導医としての自分の考え方が重なるのです。

私も普段から患者さん目線でのコミュニケーションを心がけていますが、特にコミュニケーションが苦手な若い方々には是非とも読んでほしい1冊です。自分をどう生かせるか自分で考えることの大切さはサッカーもチーム医療も同じであり、それは組織だけではなく子育てなどにも共通する大切なことだと思うのです。

豊橋医療センター（愛知県）
臨床研究部長
脳神経外科部長
酒井 秀樹さん

*今回ご紹介した書籍を抽選で3名様にプレゼントします

⇒P14をご覧ください

特集

明日の医療につなげる NHOの研究活動

～臨床研究や先進医療への取り組み～

国立病院機構（以下、NHO）では、長年積み上げてきたノウハウと全国的なネットワークを生かしながら、明日の医療につながる研究や新しい治療・薬などの開発にも力を注いでいます。今回はこうした研究や開発について、先進医療の実例を交えながらご紹介します。



| 臨床研究

病気の原因の解明や、診断・治療・予防法の開発、あるいはQOL（生活の質）の向上などを目的に行われる研究

| 治験

臨床試験のうち、新しい薬や医療機器について国の承認を受けるために行われる臨床試験のこと。医師主導と企業主導がある

| 臨床試験

臨床研究のうち、患者さんや健康な人に試してもらうことで新しい薬や医療機器などの評価をすること

| 先進医療

厚生労働大臣が定めた高度な医療技術を用いた治療。将来的に、健康保険が適用される保険診療にすべきかどうか評価するため、保険診療との併用が認められている

NHOという土壤の中から 新たな希望を育てていく



国立病院機構本部 総合研究センター長 伊藤 澄信 医師

日本の先進医療に貢献するNHO

NHOの役割には幅広いものがありますが、明日の医療の発展に貢献しているという意味では、先進医療を含めた臨床研究があげられます。NHO本部(東京都目黒区)にある総合研究センターの伊藤澄信センター長は、「新たな研究に取り組める土壤があることが、一般の病院とは異なる私たちの強みでしょう」と語ります。

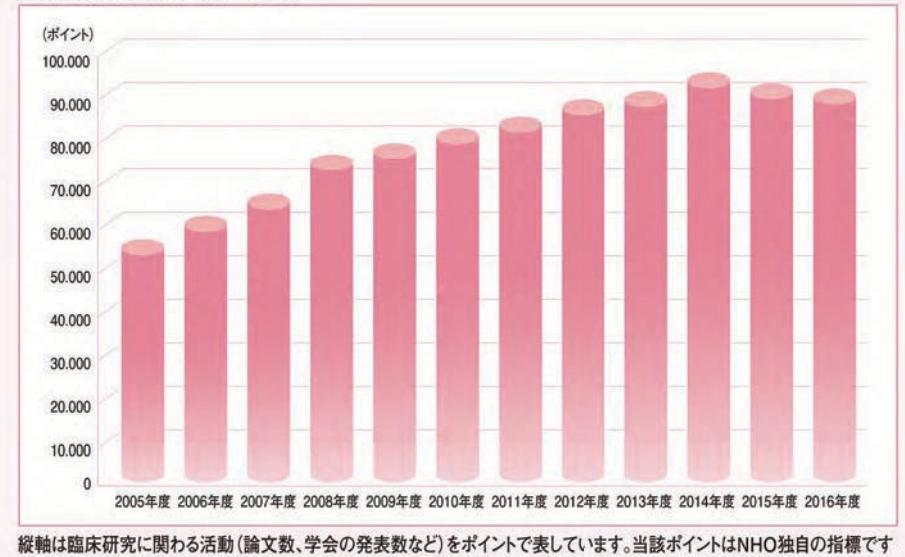
最先端の保険診療といえる先進医療は厚生労働省が認定した特定の医療施設でしか行えませんが、NHOの約20病院がそれぞれ特定の先進医療を実施できる医療施設に認定されています。また、NHOの医師が主導して新たに先進医療として認められたものもあり、大阪府豊中市にある刀根山病院での取り組み(隣のページで紹介)はその一例です。

高度な臨床試験を行える病院の集まり

臨床研究については、伊藤センター長は「広く行われている一般的な研究よりも、より高度な臨床試験を行える病院の集まりがNHOだと考えてほしい」といいます。臨床試験には治験も含まれますが、NHOでは医師主導の治験を行うことでより信頼性の高いデータの確立を目指しているのです。

また、今年(2018年)の4月から臨床研究の信頼性を確保するため臨床研究法という法律が施行されています。

臨床研究活動実績の推移



臨床研究の実例～刀根山病院(大阪府)の先進医療～ 筋ジストロフィー患者の心不全治療の大きな可能性

患者さんを照らす一筋の光



「今では遺伝子レベルで病態の解明が進んでおり、治療法の開発も盛んに行われています」。筋ジストロフィーについて、こう話してくれたのは刀根山病院で日々、神経・筋難病の患者さんと向き合っている臨床研究部長兼神経内科部長の松村剛医師です。

筋ジストロフィーは遺伝性の神経・筋難病のひとつで、筋肉の機能を維持するための遺伝子に変異が生じて全身の運動機能が低下する進行性の病気です。さまざまな病型がありますが、代表的な病型であるデュシェンヌ型は小児期に発症し、以前は多くの方が成人式を迎える前に亡くなっていました。しかし呼吸ケアや心筋保護診療などの集学的医療※により、寿命が大幅に伸びています。これはNHOを中心とした医療の成果です。ただ、根本治療が確立されておらず、「治らない病気」として知られているのも事実です。

近年、筋ジストロフィーの病態の解明に伴って、遺伝子レベルの治療法から炎症・酸化ストレスの抑制、筋肉量の調整因子を標的とした治療法など様々な治療法が開発されており、機能予後の改善が期待されています。一方で、筋ジストロフィーの患者さんは心不全を併発する場合も多いため、新しい治療薬で体が動かせるようになっても心不全のために日常生活が制限され、寿命も延びないことが懸念されます。また、心不全末期では患者さん・ご家族の苦痛がとても強く、診療にあたるスタッフのストレスも大きくなります。このため筋肉の治療薬とともに心臓の治療薬の出現も待たれています。そうした中、一筋の光として期待されているのが、今年の2月にようやく先進医療の承認

にまでこぎつけた「筋ジストロフィー心筋障害に対するTRPV2阻害薬内服法」という臨床研究です。

注目された30年以上前の薬

筋ジストロフィーの場合、心臓の筋肉(心筋)における細胞の表面にカルシウムを細胞内に取り込む入口(TRPV2という)がたくさん現れるため、細胞内のカルシウム濃度が上昇し心筋が壊れてしまい、心不全(心筋症)が引き起こされます。そうなると心臓の最も大切なポンプとしての機能が失われていくのです。そのため、心筋細胞表面のカルシウムを取り込む入口(TRPV2)を阻害(阻止)するための薬の研究が今回のテーマでした。

TRPV2の阻害によって心臓の機能が回復するということを最初に発見したのは国立循環器病研究センターの岩田裕子先生です。動物を使ってさまざまな薬を試してみたところ、トランニラストという薬にTRPV2を阻害する効果があることが分かりました。実はこのトランニラスト、既に30年以上前にアレルギーの薬として保険承認された処方薬なのです。新薬ではなく古い承認薬であるということが大きなポイントで、長い使用実績があるため高い安全性が期待でき、飲み薬なので患者さんの負担も少なく、価格も抑えられます。それが心不全に効くのであれば非常にメリットが大きいと期待されているのです。その岩田先生から環境が整えられるNHOで臨床研究ができるのかと相談を受けたのがそもそもの始まりでした。

※より高い効果を得るために複数の治療法を組み合わせること



患者の宗本智之さんの呼吸状態を確認する松村医師。宗本さんは日本筋ジストロフィー協会の筋ジストロフィー啓発キャンペーンテレビCMにも出演している

患者さんへの想いが苦難を上回る

筋ジストロフィーはもともとNHOで長年の研究実績があり、高度な医療ケアを必要とする患者さんを全国で診療していること、予測される合併症も比較的少ないなど、臨床研究を進めやすい環境がありました。

ただ、「ここまで来るには苦労も多かった」と松村医師は語ります。岩田先生から相談を受けたのが2014年、小人数での数回の試験を行って効果の可能性を確



認し、PMDA(医薬品医療機器総合機構)新たな医薬品や医療機器に対し、治験前から承認までを指導・審査する機関)や厚生労働省にも相談しながら2016年にNHO内でようやく研究費の申請が採択されNHOの中央倫理委員会を通ったのが2017年、先進医療申請をして技術審査委員会との安全性を第一にしたやりとりで1年近くを費やすなど、先進医療として認められるまでに3年余りの歳月がかかったのです。そしてようやく、今年(2018年)の夏には患者さんが刀根山病院で先進医療を利用できる見込みとなりました(今後、NHOを中心とする15施設に拡大予定)。

筋ジストロフィーにおいても心臓の問題はもっとクローズアップされるべきで、「心臓が少しでも良くなるような治療法を確立できればという想いは強い」と松村医師。このトランニラストによって心臓の回復が見込める、少しでも体を動かしたいという患者さんの希望と、寿命の延長を両立させられる可能性が高まるのです。

さらに、筋ジストロフィーに限らず心不全全般や他の骨格筋障害などにおいても効果が期待でき、その広が



スタッフステーションに貼られた「倫理のりんご」。看護師一人ひとりが自らの目標を書き出し、自問自答している

りの可能性は大きいのです。

臨床研究に携わるスタッフの想い

筋ジストロフィーなどに対する臨床研究は、セーフティネット医療を実践しているNHOだからできると松村医師は語ります。神経・筋難病などの場合、呼吸器を含めて身体全体に関わる長年の総合的な治療と管理そしてケアが必要なので、大学病院でも対応が難しいのです。

また、ある病気に対して承認された薬から別の病気に対する有効性を見つけることをリポジショニングといいますが、既に承認済みの薬なので製薬企業などではなかなか研究が進まないのが実情です。もともとNHOには神経・筋難病などに関する他の機関・団体とも連携したネットワークや研究班があり、そういう多層的なコミュニケーションを活用することで臨床研究が行われています。企業や他の病院の手が届きにくいセーフティネット医療を長年担ってきたNHOだからこそ、その経験とネットワークの強みを生かしながら「少しでも患者さんが楽になれる治療を確立したいという想いに駆られ、私たちは頑張っています」と松村医師は語ります。



臨床研究コーディネーター(CRC)や事務職員が常駐している臨床研究支援・治験管理室

患者さん・ご家族と一緒に院内に花を

病院内の廊下にある「花咲か爺さん…の木」(取材時)。木や人物などの下絵は季節によって変わり、通りがかった患者さんやご家族が“花びら”に目標や夢を書き込んで貼り付け、みんなで花を咲かせる



刀根山病院(大阪府豊中市)

許可病床数500床。100年の歴史をもつ結核を含む呼吸器疾患、神経・筋疾患および骨・運動器(整形外科)疾患の専門病院。臨床研究部が設置されており、最新の医療を提供できるよう医師主導臨床研究の立案・企画・実施を積極的に推進している。



歌とダンスで患者さんを笑顔に

笑顔でつながる 院内ミュージカル

むかしむかしの物語。桃四郎は…

『桃太郎の鬼退治』

東京医療センター

受け継がれてきたのです。

今年で4回目の出演となった丸山みなみ診療放射線技師によると、「大きくなったら参加するんだ」と言って毎年観に来てくれる子どもの患者さんもいて、稽古が辛い時でも「続けなきゃ!」と逆に自分が励まされるといいます。また、キャトル・リーフ理事の田中由紀子さんは、「病気を忘れちゃった」と笑顔で帰っていく患者さんもいるといいます。患者さんを笑顔にするために始まった活動ですが、楽しみにしてくれている患者さんの笑顔がメンバーたちを逆に励まし笑顔を分けてもらっている、そんな好循環が18年も続いている理由かもしれません。



キャストみんなでお見送り



オシャレでかっこいい鬼たち



スペシャリストの素顔

医療現場ではさまざまな職種の職員が働いています。

今回はその中から理学療法士と臨床研究コーディネーターをご紹介します。



理学療法士(PT)の役割は?

リハビリテーション(以下、リハビリ)の専門職には、社会への適応を目指した身体と心の両方のリハビリを担う作業療法士(OT)、話す・聞く・食べる・飲み込むといった機能回復を担う言語聴覚士(ST)、そして理学療法士(PT)の3職種があります。

理学療法士は立つ・座る・歩くといった基本動作の回復を担う専門職で、一般的に整形外科の術後リハビリや脳卒中などのリハビリを担当します。ただ、もっと奥は深く、例えば、歩く動作に必要なのは脚力だけではなく、さまざまな身体機能も使っているように、階段昇降や寝返りなども基本運動であり全身応用運動でもあります。このような運動による身体能力の活性化は、作業療法士や言語聴覚士がADL(日常生活動作)に関わる訓練を行う際のひとつの土台になると思います。患者さんのQOL(生活の質)の向上につながる、最も大切な基礎を担っているのが理学療法士なのです。

神経・筋難病に対するリハビリとは?

箱根病院は長い歴史を経て、筋ジストロフィーや筋萎縮性側索硬化症(ALS:神経細胞が侵され思うように筋肉を動かせなくなる病気)といった神經・筋難病全般に対応している特徴的な病院なので、神經・筋難病に即したリハビリも行っています。例えば、神經・筋



サイボーグ型ロボットHALを使った歩行訓練

箱根病院
高橋 宏幸さん
理学療法士

理学療法士 (PT)

リハビリテーションに関わる3職種のひとつで、病気・けが・高齢・障害などで運動機能が低下した人に対し理学療法を行う国家資格。運動のほか、電気刺激・マッサージ・温熱などの療法も用いて基本的動作能力の回復を図る。

も行います。また、どれだけ空気を肺に取り込めるかが予後に大きく影響してくるので、呼吸の練習などもリハビリの一環です。

健常者が意識せずにしている動作でも、神經・筋難病の方にとっては人生を大きく左右することがあり、呼吸療法はとても大切なリハビリのひとつなのです。

在宅の患者さん・ご家族への対応は?

神經・筋難病の場合は日々大きな変化が起こることもあり、リハビリスタッフのみならず医師・看護師などを含めて毎朝、まるでいさつをするように患者さんの情報を自然と交換しています。また、箱根病院には訪問看護部門もあるので積極的に地域に出かけています。在宅の難病患者さん向けの相談会にも院長・看護師・ソーシャルワーカーなどと一緒に出かけ、治療はもちろん経済的な不安による心の問題まで、各職種が専門性を生かしながら孤立しがちなご家族の精神的不安の解消にも努めています。さらに、地域の訪問看護ステーションとも情報を共有するなど、文字通りセーフティネット(P09-10参照)の一翼を担っているのです。

NHOには特徴的な医療を提供している病院が多く、それだけにさまざまな病気の患者さんやご家族と接する機会があります。各分野のスペシャリストになることを目標にしつつも、多くの人のお役に立てるよう思慮熟考できるジェネラリスト(広範な知識を持つ人)を目指しています。

名古屋医療センター
中村 和美さん
副看護師長

臨床研究 コーディネーター (CRC)

看護師・薬剤師・臨床検査技師などとしての豊富な現場経験を生かしながら臨床研究の関係者を調整・支援し、倫理性と科学性に基づいた臨床研究を実現する専門スタッフ。Clinical Research Coordinatorの頭文字からCRCとも呼ばれる。

臨床研究コーディネーターとは?

臨床研究コーディネーター(以下、CRC)は、臨床研究(治験も含む)に参加していただく患者さんと医療スタッフ(医師や看護師など)の双方を調整・支援することで、臨床研究が安全かつスムーズに行われるための業務を担う専門スタッフです。患者さんに対しては研究内容を分かりやすく説明し、医師の診察の際には同席して説明を補足したりするなど、患者さんの不安が最小限になるように、そして信頼される存在となるよう努めています。

同時に、患者さんへの説明資料や副作用などに関する報告書の作成、データの信頼性を高めるための記録の整備や保管、治験を依頼した企業や研究の代表者との調整など、臨床研究の開始前から終了後まで一貫した幅広い業務・役割を担っています。

CRCとして心がけていることは?

臨床研究に参加してくれる患者さんやご家族と接する場合に常に意識しているのは、“もし自分や自分の家族が参加するとなったら”という視点です。患者さんに研究につ

いて理解をしてもらうことはもちろん、患者さんがお持ちの症状や背景についても十分に理解しつつ、患者さんの意見を尊重し同席して患者さんの理解を見極めることも大切



ながら研究参加の意思を確認するように努めています。また医療スタッフに対しては自身の看護師経験などを生かした、通常の診療業務と研究に関連する業務との違いを理解した上ででのサポートを心がけています。

名古屋医療センターでは血液の病気や子どもの希少疾患に対する初期段階の治験も多く、有効性・安全性に関する情報が少ない段階での治験になるので、患者さんやご家族に対するより慎重な対応が必要になります。当然、予期できなかったような副作用などが起きた場合は研究依頼者にもすぐに報告し、必要に応じて同じ治験に参加している他の医療機関に注意喚起してもらうなど安全性の向上に努めています。同時に、臨床研究の国内の動向(規制など)にアンテナを張り、最新治療について勉強を怠らないようにしています。

看護師としても経験豊富な中村さんの息抜きは、わんこ専用アプリ「クンカル」への愛犬写真アップ



読者の皆さんに伝えたいことは?

印象的だったのは「病気の自分でも人の役に立ててうれしい」という治験参加者のお言葉でした。CRCとして新薬開発の初期段階から国に承認されて発売されるまで関わることも多く、「この薬が未来の患者さんの役に立つ」という想いを患者さんと共有できることは、CRCとしての何よりのやりがいです。

臨床研究への参加は、もしかするとマイナスのイメージを持っている方もいるかもしれません。今では法の整備も進んでおり、患者さんの安全性を第一に考えた体制も専門スタッフも整ってきています。最新の医療をより早く皆さんに提供するためには患者さんの協力が欠かせないのです。

神經・筋難病
の最前線

サイボーグ型ロボットHALが 広げたりハビリの未来

新たな機能の獲得が幸せにつながる

「適切な医療とケアが提供できれば、人は幸せな人生を組み立てられる」。そう話すのは新潟病院の中島孝院長です。新潟県は東西に細長く、その距離は実に約330kmでほぼ東京・名古屋間の距離に匹敵します。同院はそれほどの広範囲をカバーしている神經・筋難病をはじめとしたセーフティネット医療を担う地域の基幹病院です。

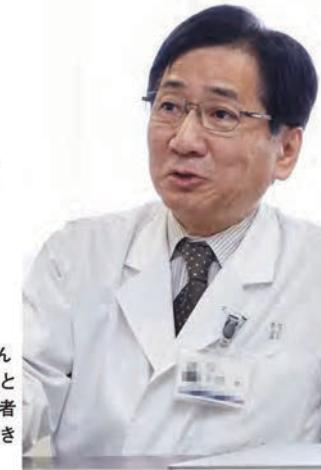
一方で、輪番制(複数の病院で持ち回ること)による救急車受け入れにも対応しており、スタッフのモチベーションやレベルアップにもつながっていると中島院長は語ります。セーフティネット医療と地域医療との融合が、バランスのとれた高度な医療を提供しているのです。

中島院長は“生涯発達”という概念を大切にしており、難病であっても工夫次第でもっと幸せになれるはずだと考えています。その考え方方が特に浸透しているのがNHO病院の中でも屈指の規模を誇るリハビリテーション(以下、リハビリ)部門であり、成長の発達を促すことで新たな機能を獲得するためのさまざまリハビリが行われています。そのひとつが、筋ジストロフィーといった神經・筋難病の患者さんに対するサイボーグ型ロボットHAL(ハル: Hybrid Assistive Limb)を使ったリハビリです。

HALがもたらす新たな希望

HALは身体機能を改善・補助するだけではなく、再生・発達させることができる世界初のサイボーグ型ロボットです。もともとは筑波大学の山海嘉之(よしゆき)教授が福祉用に開発したものですが、中島院長と旧知の間柄である山海教授から当時、開発中だったHALの存在を知り中島院長は難病の治療にも生かせないかと考えたのです。

そこで中島院長らは福祉用HALが開発されると



「どんな難病であっても患者さんはさなる幸を求めていた」ということに気付いて初めて、患者さん目線での治療・研究ができるようになった」と中島院長

早々に難病患者さんに試してもらいました。ところが結果は散々でほとんど動作しませんでした。HALは皮膚表面から出る微弱な運動単位電位をキャッチして動きを補助する装置ですが、健康な人をモデルに開発されたため、神經・筋難病の患者さんの運動単位電位をキャッチできなかったのです。神經・筋難病の患者さんの運動単位電位をどのようにキャッチすればいいのかという研究を続け、ようやく神經・筋難病の患者さんでも動作する方法が分かったのは4年余りたった2009年、神經機能の再生にHALが役立つかもしれないという新たな希望が見えた瞬間でした。

こうして神經・筋難病用に試作されたHALを患者さんに試してもらったところ、歩き方をかなり改善できることが分かりました。希望は確信に変わり、ようやく医療用モデル開発のスタートラインにたどり着きました。



HAL 医療用下肢タイプを使った歩行練習。練習中の患者さんは脊椎損傷でほぼ無反応だった足がHALのお蔭で支えなしで歩けるようにまで回復。「あまりに劇的で、人生観まで変わった」と笑顔で話す

通説を変えた HAL の力

新潟病院では中島院長を中心として医療用HALの治験がスタート、その目的は悪化していく病態をロボットの力で安定させ、さらには新たな機能を獲得できることをより多くの患者さんで実証することでした

た。神經・筋難病の場合、上手く筋肉を動かせないのでどうしても過剰に他の筋肉を使うことになり、その無理が筋肉をどんどん壊して病状を悪化させます。そこで、休める筋肉は休めたまま、必要な筋肉のみを上手に使えるよう補助できる装置としてHALが試されました。また、確かな医学的エビデンス(この治療法がよいといえる根拠)を得るために筋ジストロフィーなど8疾患に絞り研究を続け、2015年によく医療機器の承認にこぎつけました。さらに2016年には保険適用も認められ長期使用も可能となったのです。

現在、新潟病院などで行われているHALを使ったリハビリは、長期といつてもずっと使い続けるわけではありません。例えば3週間で9回使い、2ヵ月後にまた9回使うといったことを繰り返します。一定の間隔を空けてリハビリを繰り返することで神経筋が再構成されるのです。当初は日常の動作の福祉的な補助具と考えられていたHALですが、神經・筋難病8疾患のみならず他の難病でもかなりの改善効果を見込めるということが分かっており、その効果予想は中島院長の言葉にすれば、「学問の通説が変わるほど」とのことです。

こうした成功の背景には、関わった関係者やスタッフの努力とともに、新潟病院で治療を受けている患者さんやご家族の強い後押しも大きかったですと中島院長は語ります。



さまざまなタイプのHAL。福祉用と医療用に大きく分かれ、今では肘や膝用の単関節モデルまである

新潟病院に見るNHOの役割

新潟病院は厚生労働省やPMDA(医薬品医療機器総合機構:新たな医薬品や医療機器に対し、治験前から承認までを指導・審査する機関)が作った諸制度にも対応でき、スタッフの技能・意識も高いため、大学病院でも取り組んでいないようなハイレベルの臨床研究が可能です。また、遺伝性の病気の患者さんや

ご家族に対応できる遺伝外来もあり、病気のメカニズムから心理的なカウンセリングまで、一貫した治療・サポート体制を備えています。症例が少ないゆえに孤立しがちな患者さんやご家族に交流の場を提供しているのもその例であり、理学療法士を束ねる猪爪陽子理学療法士長は「経験者の話は共感して納得してもらいやすく、お互いの支えにもなっている」といいます。

NHOにはそうした環境が整った病院が多く、神經・筋難病ネットワークのような強固な連携もあります。神經・筋難病のみならず、各領域のいろんな疾患に対して世界レベルでの臨床研究やサポート体制構築を続けているのです。

「リハビリでも少しでも笑顔になれるように、ちょっとした工夫が大切」と猪爪理学療法士長



新潟病院の理学療法室。
右は天井走行リフトとホイスト(体を吊り下げ支える道具)を使った歩行練習の実演。天井走行リフトを使えば安全に室内のどこへでも移動できる

病院内にある佐藤伸夫美術館

佐藤さんは地元柏崎市出身の“車いすの画家”として知られ、新潟病院に通う患者さんのひとり。ご家族の寄付により3部屋を使って作品が展示されており、来院する人々の心を和ませている。



新潟病院(新潟県柏崎市) 許可病床数 350床



小児科・外科・神経内科・内科・心療科などの地域医療と難病などの専門医療を担う地域の拠点。「こどもとおとなのための医療センター」というユニークな名称を冠し、チーム医療とリハビリテーション医療を軸として地域に貢献している。



岡山医療センターの周産期医療 命の誕生にあたって家族中心のケアを実践

県指定の周産期医療の拠点

岡山医療センターは、突発的なことが起こりやすい妊娠中や分娩時の母子を守る周産期医療に取り組み、その歴史は約半世紀にも及びます。

「早産で生まれてきたり、病気をもって生まれてきた赤ちゃんが地域の産院の先生から紹介されてきます。周産期医療は、赤ちゃんの先々のことまで考えて診る新生児科を中心に、お母さんとご家族、赤ちゃんに幸せになってもらうことを目指す医療」と産婦人科医長の多田克彦医師。

岡山医療センターはMFICU(母体・胎児集中治療室)とNICU(新生児集中治療室)の両方を備え、2005年に岡山県から総合周産期母子医療センターの指定を受けました。新生児科・産婦人科・小児外科をはじめ関係各科が協力し、母体・胎児、新生児に高度な医療を提供しています。

総合周産期母子医療センター長である新生児科の影山操医師は「まだしゃべることができない赤ちゃんが、今何をしてほしいんだろう、何を求めているんだろうと考えるようにしています」と、「赤ちゃん目線」を常に大切にしているといいます。また、新生児の手術を担当する小児外科医長の中原康雄医師は、「安全かつ確実な方法でベストを尽くしています」と語ります。



NICU でわが子と面会する夫婦。

岡山医療センターには NICU が 18 床、MFICU も 6 床あり、即座に対応できるようさまざまな機器類も備えられています



「赤ちゃんは、まずお母さんのお腹でしっかり育つことが重要」と
多田医師(左)。中央は影山医師、右は中原医師

妊娠婦に寄り添って心のケアも

総合周産期母子医療センターでは、お母さんのための産科医、助産師、赤ちゃんのための新生児科医と小児外科医、必要に応じてバックアップしてくれる他科の医師に加え、看護師、心理療法士がチーム医療を実践しています。

「病棟全体として、妊娠婦さんの“想い”を大事にしていきたいですね」と常久幸恵看護師長。自分の赤ちゃんが突然入院することになったお母さんは、心が不安定になるからです。また、NICU専属の松田良子心理療法士は、「お母さんから無理に聞き出すのではなく、自然と話せるような環境づくりを心がけています」と、自身の仕事を“慣れない環境で不安な母親に寄り添うこと”だと表現します。

「最近では出生前診断により胎児期に異常が見つかることが多くなっています。そのような場合、各科で綿密に計画を立て、妊娠婦さんをはじめ、ご家族にしっかりと説明して不安を取り除くようにしています」と中原医師。影山医師は、ご家族が治療計画やケアにかかるほうが赤ちゃんの術後の経過が良好になるというデータがあるといい、“ファミリーセンタードケア(家族中心のケア)”の重要性を強調します。説明の際には産科医、小児外科医、助産師だけでなく心理療法士も同席し、緊急入院の場合は少しでも早く家族の心が落ち着くよう、重症度にかかわらず速

やかに説明を行います。このことが患者さんやそのご家族との信頼関係を強くするのです。

岡山医療センターのNICUは365日24時間いつでも面会が可能です。赤ちゃんの両親や祖父母はもちろん兄弟も入室でき、全国的に珍しい優しい対応となっています。



「お母さんは退院してから地域で孤立しがち。時には周りのお節介も必要かもしれません」と石野副看護師長(左)。中央は松田心理療法士、右は常久看護師長(右)

ドクターカーも使って産院とも連携

地域の産院の医師とは勉強会などを通して“顔が見える関係”にあり、連携力を発揮しています。救急を要する新生児がいると産院から連絡が入ると、岡山医療センターの新生児専用救急車(ドクターカー)が出動します。新生児専用救急車は、一般的な救急車と同じ造りですが、赤ちゃんを運ぶための保育器が積み込めるようになっているのが特徴です。影山医師は新生児専用救急車に乗り込んで産院に向かい、処置を行ってから岡山医療センターに搬送します。

特に人口に対して病院の少ない地域では、この新生児専用救急車がなくてはならないものになっています。ところが、新生児専用救急車を保有する病院は岡山県内に2施設だけで、岡山医療センターは県域の半分をほぼカバーしているのです。

また、岡山県でNICUを備える医療機関は岡山医療センターを含めて6施設あり、そのすべてが当直医を待機させ24時間体制を敷いています。岡山県としても母体と新生児に手厚い体制を整えているのです。ただ、「今後は医師を疲弊させないようにしながら救急対応を続けるために集約化も必要でしょう」と影山医師は課題を指摘します。

周産期医療のさらなる充実を目指す

NHOではネットワークを生かした多施設共同研

究にも取り組んでいます。例えば産科領域の研究では、妊娠糖尿病にかかった人は将来的に2型糖尿病を発症する確率が高くなることが分かっていますが、母乳育児によって発症を抑えられるという海外のデータがあり、NHOでも現在検証中です。また、早く破水してしまった妊婦さんに特定の抗生物質を投与すると妊娠期間が延びるケースが見られ、その研究も多施設共同で始まります。

このようにNHOでは、各地域の周産期医療のさらなる充実を目指した連携を続けているのです。



カンファレンス中のNICU看護師たち。ささいな変調も見逃さない



MFICUのスタッフステーション

先進国で初の「赤ちゃんにやさしい病院」に指定

岡山医療センターは1991年、WHO(世界保健機関)とユニセフ(国連児童基金)より先進国で初めて「赤ちゃんにやさしい病院(BFH:Baby Friendly Hospital)」に



認定されています。自母乳での育児を支援するなど、母子とその家族が幸せになるためにさまざまな取り組みを進めています。

母と子の強い絆を描いたイラスト入りの「赤ちゃんにやさしい病院」認定証

岡山医療センター(岡山市) 許可病床数609床



地域との結びつきの強い急性期総合病院。「今、あなたに、信頼される病院 一病める人への貢献、医の倫理に基づく医療への精進と貢献」を理念に、周産期医療など各領域の拠点病院としても地域に貢献している。



病院の管理栄養士が考えた 体が喜ぶレシピ

家庭でも簡単に作れる健康メニューをご紹介するこのコーナー。今回は西別府病院の藤原彰さん(栄養管理室長)が紹介する大分県の郷土料理“だんご汁”です。

きし麺状の“だんご”がポイント ～だんご汁～

不足しがちなビタミンや食物繊維もしっかり!



【食材】 1人分 (4人分)

A	豚肉スライス	30g (120g)	八丁味噌	6g (24g)
	さつま芋	40g (160g)	油	3g (12g)
	干ししいたけ	3g (12g)	水	200ml (800ml)
	大根	60g (240g)	B 小麦粉 (薄力粉)	30g (120g)
	ごぼう	20g (80g)	木綿豆腐	20g (80g)
	人参	20g (80g)	合わせ味噌	12g (48g)
			生姜	3g (12g)
			小葱	3g (12g)
			柚子胡椒	5g (20g)

- ① Aの食材をそれぞれ食べやすい大きさに切る。
- ② 鍋に油を熱し、①の食材、八丁味噌を入れて炒める。
- ③ ②に水を入れ、野菜類が軟らかくなるまで煮込む。
- ④ Bの小麦粉と手でつぶした木綿豆腐を合わせてこね、きし麺状にまとめだんごを作る。
- ⑤ ④のだんごを入れ、浮いてくるまで煮込む。
- ⑥ 合わせ味噌を溶き入れる。
- ⑦ 器に盛付け、せん切りの生姜と小葱を入れる。
- お好みで柚子胡椒を溶かす。

こんな食材が自慢です！



大分県は椎茸栽培の発祥地といわれています。また、特産品である原木の干椎茸の生産量は、全国の約半分を占めるとされ、かぼすと並び大分県自慢の食材です。ちなみに、今回使用したきし麺状に手延べした“だんご”にきな粉や黒砂糖をまぶしたもののが大分県郷土スイーツ「やせうま」です。また、ゴーヤとなすを水溶き小麦粉で炒める「こねり」という夏定番の郷土料理もあり、県内の国東(くにさき)半島では“オランダ”とも呼ばれています。語源は不明です。



西別府病院 (大分県別府市)

許可病床数350床
結核・ALSなどの神経難病・筋ジストロフィー・重症心身障がい児(者)などのセーフティネット医療も担う大分県の拠点病院。栄養管理室では料理屋でのおもてなしを目標に、完成度の高い料理の提供に取り組んでいます。

藤原さんからのメッセージ

当院がある大分県の別府は、言わずと知れた温泉の町で温泉湧出量は日本一です。
ぜひ体と心の両方の癒しに温泉県大分へお越しください。

もしもに備えて

あなどることなけれ！ やけど(熱傷)の対応

今回は家庭でもおこりやすいやけど(熱傷)について、北海道医療センターの廣崎邦紀医師(皮膚科医長)に聞きました。

1 一番の問題は表皮からの深さ

やけどの程度はその面積もさることながら、皮膚表面からの深さが問題です。深さでI度からIII度までに分けられ、最も深くて深刻なのがIII度です。特にIII度は面積が狭くても重症となりやすく、注意が必要です。

皮膚の表面に大きな水疱(みずぶくれ)ができているとII度の可能性が高く、II度とIII度は医師でも最初は見分けにくいので、ひどくないよう見えて実は深い場合もあります。また高齢者の場合、特に低温やけどなどに気付くのが遅くなる傾向にあり、その分ひどくなりがちです。

2 大切なのはとにかく冷やすこと

家庭でありがちな場面といえば、カップラーメンやコーヒーをこぼした場合などでしょう。いずれにしても大切なのはすぐに患部を冷やすことです。やけどが深くならないよう水道の冷水などで必ず10分以上冷やしてください。また、服の上からかかった場合は放っておくとやけどが深くなるので、服の上からでもいいので冷やすことを優先しましょう。

廣崎医師の趣味はチェロ。全国の皮膚科医師を中心に結成された“皮膚科のオーケストラ”にも参加しているとか。



3 勝手な判断をせず早めの受診を

やけどが深いと壊死をおこしたり細菌に感染したりすることもあり、傷跡が残ることもあります。そのため、冷やした後は出来るだけ早めに医師の診察を受けてください。皮膚科や形成外科などで診察してもらえますが、特にやけどがひどい場合に備えて深夜救急に対応している近隣の医療機関も調べておきましょう。

「たいしたことない」と勝手に判断せず、何よりも早めの受診が大切です。

北海道医療センター (北海道札幌市)



許可病床数500床。
救命救急から慢性期まで対応するハイブリッド型病院。札幌市のみならず北海道全域での政策医療(神経難病・小児慢性疾患・結核など)も担う。

より良い紙面づくりのために、アンケートにご協力を！

ぜひアンケートにご協力ください。

ご協力いただいた方の中から抽選で3名様に、P01の「私を支える至高の一冊」で紹介した『伝わる技術力を引き出すコミュニケーション』をプレゼントします。

【応募締め切り：2018年6月30日】

※ご回答はメール(国立病院機構本部広報文書課宛)にてご送信ください。

※メールの本文に質問の番号(問1、問2など)と選択肢の番号または回答文を直接ご記載ください。



風間八宏 著
『伝わる技術
力を引き出すコミュニケーション』
講談社現代新書

問1. 性別・年齢、および今号をご覧になった方法を教えてください。

性別：1. 男 2. 女 年齢：() 歳

方法：1. () 病院で 2. 機構ホームページで

問2. 読みやすく、わかりやすい広報誌だと思われましたか？

1. 読みやすい 2. 読みにくい 3. どちらでもない

理由 ()

問3. 興味をもたらした内容とその理由をお答えください。

内容 ()

理由 ()

問4. 今後、取り上げてほしい内容、テーマがありましたら教えてください。()

プレゼント抽選を希望される場合は、希望の旨をご記入ください。当選者の方には、アンケートを送信いただいたメールアドレスへ当選した旨をご連絡いたします。

送信先 メール : webmaster@hosp.go.jp

※プレゼント抽選を希望される方で、迷惑メール防止の「ドメイン指定受信」機能を利用されている方は「hosp.go.jp」を受信できるよう設定をお願いします。